

今の私からは想像がつかないと思いますが、高校三年の時に千五百メートル走で四分四十四秒の記録を出したことがあります。私の小さな自慢です。この記録が出せたことには、ある秘密があるのです。

「千五百メートルを走って計測するなんてことは、一生ないはずだ。最後だと思って、死に物狂いで走ってみろ！」

指導なのか激励なのかわかりませんが、体育の先生のその言葉が当時の私に火をつけました。これが人生最後なんだ……そう思って走ったら、思わぬ記録が出てしまいました。私だけでなく、他の多くの仲間も自己新を出しました。

この年齢になっても自慢できるのは、この先生のありがたい（？）言葉があったからです。その言葉通り、その後は長い距離をタラタラと走ることはあっても、計測しながら千五百メートルを必死に走ることはありませんでした。恐らく、これからもないでしょう。

昨日の書き初めを参観した時のことです。一応私も書写の心得がありますので、毛筆の筆跡を見ただけで、学校外で書道を習っているかどうか、ある程度わかります。

ある女子生徒の字が目に残りました。形が整っているだけではなく、始筆終筆にも力強さがあります。筆が適度なスピードで走っているのでしょう。線も非常にきれいです。この生徒は書道の心得のある生徒だと私は確信しました。

「書道を習っていたの？」

私は彼女に声を掛けました。「はい」という返事が、当然返ってくると思いません。

「いいえ、やっていません。」

「えっ、そうなの！素晴らしい字だね。書道を習っているとばかり思ってしまったよ。」

まったくの初心者が、経験を重ねるにつれて、少しずつ上達したり力を付けたりするのは素晴らしいことです。ほとんどの生徒はこのパターンです。しかし、数は少ないかもしれませんが、彼女のように皆と同じ経験を積み重ねた中で、想像以上の成果を出せる生徒もいるのも事実です。これもまた素晴らしいことであり、若者の可能性を象徴するものだと思います。

ゼロからは何も生まれません。「いやだ」「面倒くさい」などという理由から挑戦することをやめれば、生まれるのは怠惰な自分、可能性のうずもれた自分だけ。気が乗らないことでも、とにかくやってみるということが大切だとしみじみ思います。

高校時代の私は、持久走に気が乗りませんでした。でも、走り終わったら自慢できるものを得ることができました。この年齢になると、それがまたうれしいものです。（一月七日 記）